Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-07-02

シンポジウム1「交替劇と芸術」 : 趣旨説明

窪田, 幸子

(Citation)
狩猟採集民の調査に基づくヒトの学習行動の実証的研究(交替劇 : A-02班研究報告書),4

(Issue Date)
2014-03-29

(Resource Type)
research report

(Version)
Version of Record

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81009848

KOBE UNIVERSITY

シンポジウム 1「交替劇と芸術」

オーガナイザー　窪　田　幸　子

趣旨説明

デヴィッド・ルイス=ウィリアムズは，その著書の中で，「私たちはいかにして今日のような人間になり，またその途上で芸術創造するようになったのか」という大きな問いをたてている。彼がこのことを考えるために注目したのが，交替劇の時代であった［ルイス=ウィリアムズ 2012］。

45000 年前から 35000 年前までの西ヨーロッパにおいて，オーリニャック文化複合（H. サピエンス，クロマニヨン）とシャテルペロン文化複合（ネアンデルタール）が併存していた時期があり，この時期を移行期とよぶ。このプロジェクトで問題としている，交替劇の時期であるわけだが，この時に西ヨーロッパでの後期旧石器時代革命があったとされ，オーリニャック文化において，この時期に「創造の爆発」とよばれる革命的な変化が起きたという。具体的には，身体装飾につかわれる物質文化が爆発的に増大し，それにかかわる新しい技術が現れ，狩猟行動が組織化され，居住，社会空間に社会的区分があらわれる，などの一連の大きい変化であった。様々な新しい技術や習慣は，「ひとまとめのパッケージセット」として起きたとされ，そこには芸術活動が含まれていた。なぜクロマニヨンは，岩壁画を描き，ビーナス像に代表されるような彫刻をつくるようになったのか。そして，このオーリニャック文化と並行並存していた，ネアンデルタールによるシャテルペロン文化複合は，あきらかにオーリニャック文化からある程度の技術を模倣したと考えれるのだが，芸術は全く取り入れなかった。それはなぜなのだろうか。この問題は，交替劇を考察するうえで大変に重要な問題といえるだろう。

ルイス=ウイリアムズは，この違いの原因を両者の間に存在した進化による意識タイプの差に求めている。クロマニヨンは，内省（reflextion），夢見（dreaming），変性意識状態（altered state of consciousness）を記憶し，そのイメージを操作し，共有することができ，オルタナティブな世界を感情をこめて想像することができた。そして，心的イメージと二次元三次元のイメージとのつながりを認識できる意識をもっていた。彼は，ジェラルド・エーデルマンの提唱する原意識と高次の意識という考え方に従ってこのような論を展開している。

エーデルマンは意識，思考，心が脳の生物的進化の産物であることを緻密に論じている。それによれば，原意識とはあらゆる事象を認知し，心的イメージを持つことのできる意識である。これは，哺乳類のほとんどが持つものである。ただし，原意識は，現在的事象系列に強く束縛される。そこから離脱するには，社会的伝達のための新しいシステムの進化が必要だったと彼は，述べる。そのもっとも発達した形が言語能力であり，進化によってヒトはこれを獲得した。こうして，高次の意識がヒトに開花したのだという［エーデルマン 1995］。高次の意識は，社会的自己という意識の在り方を可能にし，自己の行為や感情について認識でき，過去，未来の社会モデルを描くことができ，長期にわたる記憶を意識できるようになる。このような高次の意識は，現代的言語とともに短期間で起きた進化で，それはアフリカでホモサピエンスが獲得し，西ヨーロッパに広がったとされる。

高次の意識を獲得するによって，ヒトは夢やビジョンを回想し，社会的に共有することが可能にになった。夢やビジョンといった変容意識状態から覚めたとき，内在光的要素や図像的イメージが，天井などに投影され，ビジョン（映像）として見える現象があらわれることは神経学的に知られている。このようなビジョンとしてのイメージを記憶し，展開させることが，高次意識によって可能になった。そして，そのようなイメージを固定しておくために，その表面をなぞることで，描画することにつながったのだろうと，ルイス=ウィリア

ムズは議論を展開している。

このような意識の生物学的進化の結果として描く行為が始まった，という彼の仮設に触発されて，交替劇と芸術というテーマを議論してみる目的で企画されたのがこのシンポジウムである。ここでは，意識の進化を象徴するものとして芸術に注目する。意識の進化の問題として考えてみると，芸術についてはどのような議論が可能だろうか。芸術と心，という問題について，異なる分野の専門家の立場から議論してみることを試みた。先史美学，心理学，考古学，そして文化人類学のそれぞれの分野から，議論を展開する。それによって，人々が芸術を生み出した背景をも考えてみよう。

文献

エーデルマン，ジェラルド　1995『脳から心へ－こころの進化の生物学』新曜社
ルイス=ウィリアムズ，デビット　2012『洞窟のなかの心』講談社